

一斉授業と自己調整学習の関連性を探る

ーこれまでの指導方法を問い直すー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 志村拓矢

1. 研究背景

近年、個別最適な学びと協働的な学びの実現が求められている。文部科学省（2021）は、『個別最適な学びについて、「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。「指導の個別化」は一定の目標を全ての児童生徒が達成することを目指し、個々の児童生徒に応じて、異なる方法等で学習を進めることであり、その中で児童生徒自身が自らの特徴やどのように学習を進めることが効果的であるかを学んでいくことなども含まれている。「学習の個性化」は個々の児童生徒の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げることを意味し、その中で児童生徒自身が自らどのような方向性で学習を進めていったら良いかを考えていくことなども含まれている。』と説明している。

このように個別支援のニーズが増加している一方で、学習指導を主とする日本の学校教育活動の多くは、一斉指導の形態がとられている。

一斉授業とは、1人の指導者のもとに多数の児童生徒が同じ課題に取り組み、その成果を交流し、互いに深め合っていく学習形態をいう。その教える内容は画一的なことが多く、教師を中心としてクラス全体に一斉に伝達されることが特徴である。かつて義務教育を整備していく過程で、一斉授業の効率性や経済性が注目され普及した。しかし一斉授業は児童生徒の個人差に十分な対応ができず、柔軟性に乏しい側面もある。

「指導の個別化」「学習の個性化」を実現するための学習モデルはこれまでに様々な提案さ

れてきた。奈須（2021）は、個別化・個性化教育の代表的な事例として、山形県天童市立天童中部小学校の「マイプラン学習（単元内自由進度学習）」を取り上げ、「子どもがする（学習者主体の）授業」として、教師と子ども双方の周到な準備のもと、単元の学習を子供が自立的に学んでいくことを目指しているを紹介している。

また、高橋（2023）は、「ICTを活用した複線型（クラウド型）授業づくりを行うことがこれからの時代の授業で求められている」と述べている。クラウドの共有機能を使いながら、子どもが自分で目標を立て、自分の学習しやすい形態を選択し、興味・関心に合わせて学習内容を考えたり、仲間と協力して学習に取り組んだりすることで、学習意欲は向上すると考える。これは、令和5年度全国学力・学習状況調査の結果で、「自分にあった授業だと学校に行くのが楽しい」と回答している児童生徒が7割近くいることから分かる。

単元内自由進度学習や複線型（クラウド型）の授業は、自己調整学習の1つであるといわれている。Zimmerman（2014）は、自己調整学習における学習サイクルの過程を「予見段階」「遂行コントロール段階」「自己省察段階」の3つの段階に分類している。予見段階は、活動の下準備を行う段階、遂行コントロール段階は、活動中に生じ、活動に直接影響を与える段階であり、自己省察段階は、遂行後に生じ、自らの努力に対して反応する段階になると述べている。また、伊藤（2009）は、自己調整学習を「児童・生徒が、自らの学習過程を計画・モニタリングし、うまくいったところはどこか、どのようにすれば次には改善できるのかを振り返り、自らの学びを

最適なものにするためにコントロールする力を指すものである。」と定義している。

しかしながら、奈須（2020）が「個別化された学びに対しては、学力の低下や格差の拡大をもたらすとの批判がある」と述べているように、学校現場では単元内自由進度学習による学力低下を不安視する声も聞かれる。加えて、比嘉（2002）も、自己調整学習の課題について「生徒間の練り合いがないので他者からの学びが低い」「思考力が低い生徒にとっては、成長の速度も遅く、ますます差が開く」と述べ、学力低下を問題点として指摘している。「子どもがする（学習者主体の）授業」を積極的に進めることにより、学習者は学ぶべき「知識・理解」や教科の「見方・考え方」の獲得に至るのだろうかとの疑問を抱かざるを得ない。

以上のことから、一斉授業と自己調整学習の関連性を探り、これまでの指導法を問い直すことで、課題解決のための方策について考えることができればと思い、本研究主題を設定した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、単元の構成において、一斉授業と自己調整学習を効果的に組み合わせ、「知識・技能」「見方・考え方」の習得と学習意欲の両輪を高めることである。

そこで、一斉授業で新しい「知識・技能」の習得と「見方・考え方」を成長させる時間をもちつつ、学習者が自己の学ぶ内容や学び方を選択できる自己調整学習の時間を設定する。自己調整学習の時間を「学びタイム」と定義する。単元のまとめとして「学びタイム」を設定し、学習に対する意欲の高まりが見られるのかを考察していく。

3. 研究方法

○「学びタイム」を進めるための3つ段階を意識した授業展開

「学びタイム」を進める上で、先述した「予見段階」「遂行コントロール段階」「自己省察

段階」の3つの段階を意識した授業を展開する。「予見段階」にあたる「めあて」や「課題達成の見通し」では、自分自身の課題を引き出し、その課題を解決するための方略（解決の方法や見通し、作戦）を立てる。（図1、2）

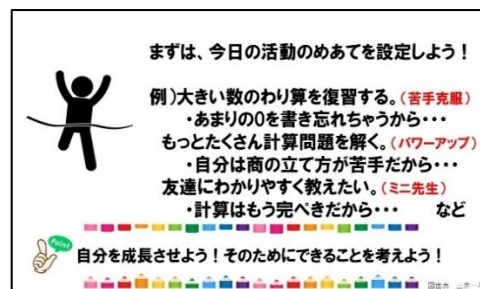


図1 自分の課題を意識しためあての設定を立てさせるための掲示物

学びのデザインシート				
課題の設定				
課題達成の見通し	😊 バツチリ	😞 まあまあ	😡 不安	
	☐	☐	☐	
理由				

図2 「予見段階」におけるめあてを引き出す学習シートの設定

「遂行コントロール段階」にあたる課題解決では、仲間の多様な考えに触れ自分の考えを修正したり、自分で順調に進んでいるかを確認したりしながら粘り強く取り組むことができるように、3種類のコースを用意する。

「苦手克服コース」は、その単元で学んできたなかで、不安がある部分について学習プリントなどを使用し、復習するコースである。（図3）



図3 苦手克服コースの説明

「パワーアップコース」は、より多くの問題を解いたり、発展的な問題に取り組んだりすることで、自分を成長させるコースである。(図4)



図4 パワーアップコースの説明

「ミニ先生コース」は、これまでの学習を生かし、自分の学びをアウトプットするコースである。その手段としては、ポスターや新聞、タブレットを使用したプレゼンテーションや学習動画を作ることを想定している。(図5)

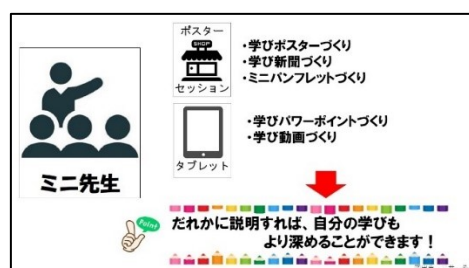


図5 ミニ先生コースの説明

「自己省察段階」にあたる「振り返り」の段階では、学習後の自己評価を行い、解決の方法などを振り返り、次の学習の予見（見通し）に反映させることができるようにする。(図6)

振り返り				
達成度	😊 バッチリ	😞 まあまあ	😞 不安	
	☐	☐	☐	☐
振り返り	👣			

図6 学習後の自己評価と振り返り

4. 対象・実践内容

佐藤（2023）が『「数学的な見方・考え方」を育てる算数授業の研究』に取り組んでいる学級での実習・実践となった。一斉授業における「知識・技能」と「見方・考え方」の習得は佐藤が担当し、それに続く「学びタイム」の時間を志村が受け持った。

(1) 対象 山梨県内の小学校

第4学年1学級12名

(特別支援学級在籍児童1名)

(2) 実践内容

- ・第1回（令和5年10月10日）45分
「わり算のひっ算（2）わる数が2けた」
- ・第2回（令和5年11月7日）90分
「計算のやくそくを調べよう 計算のきまり」
- ・第3回（令和5年11月29日）90分
「四角形の特ちょうを調べよう 垂直、平行と四角形」

5. 各実践概要

以下、「学びタイム」の実践概要について順を追って示していく。

(1) 第1回実践「わり算のひっ算（2）わる数が2けた」概要

本単元は、学習指導要領の内容「A 数と計算」(3) ア「除数が2位数や3位数の場合の計算の仕方を考え、それらの計算が基本的な計算をもとにしてできることを理解すること。また、その筆算の仕方について理解すること。」、イ「除法の計算が確実にでき、それを適切に用いること。」、エ「除数に関して成り立つ性質を調べ、それを計算の仕方を考えたり計算の確かめをしたりすることに生かすこと。」を受けて設定されたものである。また第4学年の「計算の仕方を考えよう」「1けたでわるわり算」の学習内容をふまえたものであり、「小数のかけ算とわり算」につながる単元である。

「学びタイム」を迎える前の学級の実態として、位や余りの数を正しく求めることのできない学習者も見受けられた。また、10のま

とまりを意識して式を分けて考えることができていないという間違いが多かった。また、除法の筆算においては、商が立たない場合は0を立てる場面で誤答が多く、106を160としている学習者もいた。

そのなかで初めて「学びタイム」を行うということで、学習者に対して「学びタイム」の意義や授業の進め方について丁寧な説明を行った。学習方略が3つのコースとして具体的に示されていることで、学習者は比較的スムーズに「学びタイム」の意義を理解し、自分自身で目標や計画を立てることはできていた。

表1 第1回実践における学習者の課題設定とその理由

NO	課題の設定	見通し	理由	コース
A	苦手克服コース	不安	～の位にたてて、どう計算するのかいまいちわからない	苦手克服
B	パワーアップ	不安	計算ミスがあるから	パワーアップ
C	友だちに教えたい。	まあまあ	うまくできるか不安なところがあるから	パワーアップ & ミニ先生
D	苦手克服コースの倍の見方をがんばる。	まあまあ	倍の見方筆算はできるけど図が苦手だから	苦手克服
E	がんばってやって、教えてあげられる人になりたい。	まあまあ	0の書き忘れがあるから	パワーアップ
F	友だちに分かりやすく教えてあげたい。	まあまあ	ちゃんとできているか心配だから	ミニ先生
G	筆算のわり算を完璧にする。	まあまあ	計算はできているけど、工夫とか苦手だから	パワーアップ
H	パワーアップ	まあまあ	商の立て方がちょっと不安	パワーアップ
I	パワーアップ、苦手克服	まあまあ	もうちょっと力をつけたいから	苦手克服 & パワーアップ
J	バッチリよりバッチリにしよう	バッチリ	もうすぐはやくできるようになるから	パワーアップ
K	欠席			

学習者の多くが、プリント学習に取り組んでいた。これは、活動時間が少なくなってしまうことが原因の1つとして挙げられる。

また、学習プリントについて説明が足りず、「苦手克服コース」を選択した学習者も、「パワーアップコース」を選択した学習者も、同

じ学習プリントを解いている姿が見られた。

ただ、学習者が難しく感じであろう「商がどの位に立つかの見当づけ」と「仮の商の修正をすること」については、学習プリントにおいて定着してきたことを感じた。見通しでは不安を感じていた学習者も、実践後に達成感を感じていることが分かった。

表2 第1回における実践前後の課題に対する気持ちの変容

課題達成の見通し	人数	授業後の達成度	人数
バッチリ	1	バッチリ	5
まあまあ	7	まあまあ	5
不安	2	不安	0

普段算数を苦手としているA児は、「苦手克服コース・グループで学ぶ」を選び、その振り返りでは、「3人グループで考えたらすらすらできた。むだ口もなく、成長したと思った。」と記述していた。算数に対して苦手意識を常に持っている学習者であっても、友達と協働的な学びをすることによって、前向きに学習に臨んでいる姿が見られた。学習後には、多くの学習者が学習プリントを解くことによって商の立て方を習得していた。



図7 算数を苦手とするA児が仲間と協力しながら学習に取り組む様子

(2) 第2回実践「計算のやくそくを調べよう 計算のきまり」概要

本単元は、学習指導要領の内容「A数と計算」

(6) ア (ア)「四則の混合した式や()を用いた式について理解し、正しく計算すること。」、

ア（イ）「問題場面の数量の關係に着目し、数量の關係を簡潔に、また一般的に表現したり、式の意味を読み取ったりすること。」を受けて設定されたものである。場面の数量の關係に着目して、数量の關係を式を用いて簡潔にまた一般的に表現したり、式の意味を読み取ったり、計算に関して成り立つ性質を用いて計算の仕方を工夫したりして、四則の混合した式や()を用いた式について理解し正しく計算できるようになること、及び、四則に関して成り立つ性質についての理解を深めることを主なねらいとしている。

「学びタイム」を迎える前の学級の実態として、式を変形して考えることに対して苦手意識を持っている学習者が多かった。乗法の交換法則を使う問題では、出てきた数を左から順に計算することはできるが、より簡単に計算するための工夫を考え、自分なりに表現することに課題が見られた。

第1回実践の課題を踏まえ、「学びタイム」の実施に関して改善を行った。

- ①1時間（45分）から2時間（90分）へ時間の延長
- ② 応用問題の学習プリントの用意（全国学力学習状況調査の過去問より抜粋）
- ③より自己省察を高めるための掲示物（丸つけレベル表）の追加

表3 丸つけレベル表

丸つけレベル表 ～丸つけ名人の極意～	
レベル1	丸つけをしていない
レベル2	丸つけはしているけれど、まちがっているものにまで丸をつけている
レベル3	答えを見ながら正確に○と×をつけ、×の問題には正しい答えを写している
レベル4	×の問題で何をまちがえてしまったのか、分せきしてポイントを書いている
レベル5	まちがいを分せきして、その分せきのポイントを元に解き直したり、復習している

↑目指すはここ！

改善策を基に実践を行った結果、学習者が自力でめあてを立て、計画し学習を進めることができるようになってきた。より具体的に

自分の課題が明確になり、黙々と学習に取り組んでいる様子が見られた。

表4 第2回実践における学習者の課題設定とその理由

NO	課題の設定	見通し	理由	コース	ツール
A	ミニ先生	バッチリ	自分の中で、できていると思ったからです	苦手克服&パワーアップ&ミニ先生	プリント
B	苦手克服	まあまあ	苦手ばかりで全然計算のきまりができていない	苦手克服	プリント
C	パワーアップしてみんなのため	バッチリ	パワーアップしてみんなにも教	パワーアップ&ミニ先生	プリント
D	苦手な算数の計算のきまりをがんばる	まあまあ	計算のきまりは()を使わない問題が苦手だから	苦手克服	プリント
E	自分を成長させるためにいろいろなことを練習したい。	まあまあ	さくにかくのが(計算するの)が わすれちゃうから	苦手克服	プリント
F	()を使った計算をする。	まあまあ	計算ミスしちゃうことがあるから	苦手克服	プリント
G	計算のきまりを完璧にする。	まあまあ	計算のきまりが苦手だから	苦手克服&パワーアップ&	プリント&パソコン
H	欠席				
I	まだできていないところがあるから、苦手こくふくする。	まあまあ	もしかしたらまちがったままになってしまいかもしれないから	苦手克服	プリント
J	完ぺきにしよう	バッチリ	もっとがんばりたいから	苦手克服&パワーアップ&	プリント
K	計算をもっとはやくできるつようにしたい。	まあまあ	小さな計算ミスが多いから。	パワーアップ	教科書・ドリル&ノート&プリント

また、「丸つけレベル表」を提示したことで、個人または仲間でお互いに確認し合いながら自分に合った解決方法で問題に向き合う姿が見られた。「先生にどうしてほしいのか」「どんなことだったらできるのか」など、指示ではなく、対話を通して学習者が自己決定できるよう心掛けた結果、「問題の解き方がわからない」などの児童が自己の状況を客観的に捉えた発言が見られるようになり、教師または仲間に具体的な援助を求める姿勢が生まれてきた。

今回も「学びタイム」実践後に達成感を感じている学習者が多いことが分かった。

表5 第2回実践前後の課題に対する気持ちの変容

課題達成の見通し	人数	授業後の達成度	人数
バッチリ	7	バッチリ	9
まあまあ	3	まあまあ	1
不安	0	不安	0

「苦手克服コース・1人で学ぶ」を選んだB児は、計算の仕方がよく分かっていなかったもので、個別に指導を行った。すると、やり方が理解できたのか、最後にはガッツポーズを見せ、全身で喜びを表現していた。このように、「学びタイム」を行うことで、一斉授業で理解が追い付かなかった学習者を救うことができる考えた。

「パワーアップコース、ミニ先生コース・グループで学ぶ」を選んだC児の振り返りには、自分が作成した成果物に満足している様子が見られた。しかし、C児が作成した成果物の中には問題が成立しておらず、解答不可能なものが含まれていたが、C児は気づいていなかった。学びの成果物は、誰かに見てもらい、意見をもらうことで、自分だけでは気づけなかったことに気がつき、より理解も深まる。そのような声かけが必要だと考えた。

また、「学びタイム」において、学習プリントや成果物作成は進んで取り組んでいたが、学習の基盤となる教科書やノートを使っの振り返りをしている学習者が全体の10%しかいなかった。それは、使う必要がなかったからともいえるが、学習プリントで解答を間違えてしまった学習者は特に、改めてこれまでの自分の学びの足跡を振り返ってほしいと感じた。教科書やノートを振り返る必然性をどのようにしてもたせるかが課題として挙げられた。

(3) 第3回実践「四角形の特ちょうを調べよう 垂直、平行と四角形」概要

本単元は、学習指導要領の内容「B 図形」(1) 平面図形に関わる数学的活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。ア (ア) 「直線の平行や垂直の関係について理解すること。」、 (イ) 「平行四辺形、ひし形、台形について知ること。」、 イ (ア) 「図形を構成する要素およびそれらの位置関係に着目し、構成の仕方を考察し図形の誠実を見いだすとともに、その性質を基に既習の図形を捉え直すこと。」を受けて設定されたもので

ある。2 直線の位置関係を考察し、垂直や平行の意味を知り、平行線の性質についての初歩的な理解を得ることをねらいとしている。第2 学年では、長方形や正方形など四角形について、第3 学年では、三角形についての意味や構成要素について学んできた。ここでは、用語や意味を覚えこませるのではなく、具体的な活動を通して、発見したり理解を深めたりすることが重要である。

また、学習の中で図形を観察したり、直線を用いて四角形を構成したり、対角線からできる三角形に目をつけて分解したりする活動を大切にしながら、基本的な平面図形(台形、平行四辺形、ひし形)について、それぞれの意味を明らかにしていく。そしてこれらの図形の構成要素である辺や角の持つ性質や、対角線の性質を調べるのが主なねらいである。

さらに作図の技能を確実に身に付けることが大切である。作図は、定義や性質を再確認し、理解を深めるうえでも有効である。平行四辺形やひし形は、定義や性質を活用していろいろな方法で作図することができるので、理解の定着を深める上でも重要である。

「学びタイム」を迎える前の学級の実態として、角度に関する理解はしっかりできている様子であった。三角形についてはそれぞれに名前がついているのでかたちや名称の混乱はなかったが、三角定規を組み合わせで正三角形や直角三角形を作り上げる問題を苦手としている学習者がいた。また、四角形の図形の特徴を押さえきれていない学習者もいた。作図については、やり方はわかっているものの、辺の長さを間違えて測定していたり、頂点同士をしっかりと結ばなかったりという間違いが多かった。

第2 回実践の課題を踏まえ、「学びタイム」の実施に関して改善を行った。

○ 「自分が作ったものを誰かに見てもらい、感想をもらおう」という声かけ

これまでの実践は「A 数と計算」であったが、第3 回の実践領域が「B 図形」なので、図形の定義や性質を実感し、測定や作図の技能の

習熟を図れるようより細分化した学習プリント（平行四辺形の作図（補助線有、無）、ひし形の作図（補助線有、無）、対角線など）を用意した。

「学びタイム」を行っているとき、教師が、学習プリントに取り組んでいる学習者に、自分が作図した四角形の特徴について質問をした。そうすることで、学習者は辺の長さや並び方に着目することができ、既習の四角形の性質を振り返らせるきっかけとなった。

単元終了後の評価テストでは、かなりの学習者が正しく作図できている様子が見られた。これは、自分の課題に応じて学習プリントを選び、四角形の作図方法を確認したことなどが、性質の理解を深めることにつながったのではないかと考える。

実践を重ねた結果、これまでと同じように、ほとんどの学習者が、実践後に達成感を感じていた。しかし、大きく異なる点が見られた。それは、20%の学習者が学習の見通しの段階では「バッチリ」だったのが、「まあまあ」に変更していたという点である。これは、「学びタイム」での学習を通して、自分の思っていた学習に対する理解度と実際の理解度の間に齟齬を感じ、修正したからだと考えられる。自らの学びを最適化するには、自分の状況を正しく認知できるようにならなければならない。こうした変容は、自分が作成した成果物に対して、他者から評価してもらったり、これまでの学習シートの振り返りを積み重ねたりしたことから、自分の変化を自覚化させたことが効果的だったと考えている。

しかし、中には、「パワーアップコース」を選んで、学習プリントには積極的に取り組む様子が見られたが、その解答に誤答が多い学習者がいた。このような学習者に対して、教師は「図形の特徴がまだとらえきれていないから、教科書やノートの見直しや基本問題の復習をしてほしい。」と考えるが、自分の学習状況を客観視できなければ、そこに気が付くことはできない。前述の実践前には「バッチリ」だった見通しが、実践後に「まあまあ」

に変化した学習者の実践後の感想は、「友達と一緒にいつもよりたくさんの学習プリントや自分で作った問題に取り組んでみて、自分でもどこが分からないのかがよく分かった。」と述べていた。このことから、問題が解けなかった時、何が分からないのかについて、教科書やノートで確認したり、友達に相談したりするなどの過程で、時間をかけて醸成していく必要があると考えた。

表6 第3回実践における学習者の課題設定とその理由

NO	課題の設定	見通し	理由	コース	ツール
A	四角形の名前をみんなにおしえよう	バッチリ	自分がバッチリだから、パンフレットを作ろう	ミニ先生	プリント
B	図形をかくの克服したい	不安	図形を書いたら×ばっかになる	苦手克服	プリント
C	図形のことをもっと知ろう	バッチリ	今でもけっこうできているから	パワーアップ & ミニ先生	プリント
D	欠席				
E	平行四辺形をかくためにプリントをやって練習	まあまあ	平行四辺形で平行がずれちゃうから	苦手克服	プリント
F	図形のかき方を問いがえずにかきたい	まあまあ	図形のかき方をたまにおすれちゃうから	苦手克服	プリント
G	図形のパンフレット完成させ	バッチリ	つながることがあるかもしれない	ミニ先生	ノート
H	いろんな四角形の作図	まあまあ	平行になつてなかったりするものがよくあるから	苦手克服	プリント
I	垂直・平行などの図形をすらすらかけるように	まあまあ	まだ図形がなおされているから	苦手克服	プリント
J	四角形をもっとせいかくにかきたい	バッチリ	少しのずれが多いから、きれいにかきたい	苦手克服&パワーアップ	教科書・ドリル&ノート&プリント

表7 第3回実践前後の課題に対する気持ちの変容

課題達成の見通し	人数	授業後の達成度	人数
バッチリ	4	バッチリ	6
まあまあ	4	まあまあ	3
不安	1	不安	0

6. 研究のまとめ

本研究で明らかになったことをまとめていく。まず、「学びタイム」を行うメリットについて、2点述べる。

1点目は、学習意欲の向上が見られるという点である。「学びタイム」は、学習者が学習方略や学習形態を自由に選択できる。教師も一

斉で説明することがないので、常に教室の様子を見て回ることができる。教師の声かけや仲間によって、学習評価を即フィードバックすることができることで学習意欲につながると考える。

2 点目は成果が表れやすいという点である。一斉授業の過程を経て感じたその単元における学習者の苦手や課題から、自分が選んだ学習に取り組むことができるので、結果が目に見える成果につながりやすいと考える。

次に、「学びタイム」を行う課題について、3 点述べる。

1 点目は、学習状況の見取りである。学習者が学習方略や学習形態を自由に選択できるからこそ、学習者の人数が多くなるにつれ、「今、誰が、どこで、どんなことをしているのか」などの学習状況なのかを把握することが困難になる。

2 点目は、評価方法である。1 人 1 人学習内容が違うからこそ、何を基準にして、どのように評価するのか課題になる。

3 点目は、「知識・技能」の習得と、教科の「見方・考え方」の確実な獲得がなければならないことである。学習者にただ任せるだけでは、何をしたいのか分からず、何もせずに授業が終わってしまう子も出てきてしまう。「もっと成長したい」「課題を克服したい」という学習意欲を学習者が持ち続けるための準備が必要になる。本研究では、「数学的な見方・考え方」についての研究を継続して行っている学級であったことが、成果を生むことができた大きな要因となっていたと推測できる。

「学びタイム」のような自己調整学習を取り入れた授業が、一斉授業を否定したり、一斉授業と相対立する指導法として受け取られたりする傾向があるが決してそうではない。学ぶ内容や学級の実態に応じて、それぞれの特性を生かしあい、相互に補完しあって初めて、「学習者主体の授業」を進めることができると考える。

本研究では、「学びタイム」を実践すること

で、学習意欲の向上が見られた。また、教師による評価、他者からの評価、これまでの学習シートの振り返りの積み重ねなどから、成果を実感し、自分の成長を感じ取れた学習者が多かったと考える。学習者が、日常的に「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」などを自分の責任で自己決定することで、さらに学習に意欲的に取り組むことができると考える。

最後に、今後の課題を述べる。本研究では、「学びタイム」と学力（テストによってはかることができる基礎的・基本的な知識・技能の習得）の関係を検討したものの、その因果関係は明らかにすることはできなかった。今後は抽出した学習者の年間を通した追跡調査や学習感想の質的な分析も用いながら両者の関係を更に検討する必要があると考える。また、他教科への「学びタイム」の応用や、クラウドを活用し、他者参照などの機能が学力や学習意欲に及ぼす影響などについて研究を進めていく。

引用・参考文献等

- ・B・J・Zimmerman、D・H・Schunk 編、塚野 洲一・伊藤崇達監訳『自己調整学習ハンドブック』（2014）北大路書房
- ・比嘉俊「学習の個別化とその評価—中学校理科教育実践を通して—」（2002）
- ・伊藤崇達『自己調整学習の成立過程 学習方略と動機づけの役割』（2009）北大路書房
- ・国立教育政策研究所「令和 5 年度 全国学力・学習状況調査の結果」（2023）
- ・文部科学省 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会「教育課程部会における審議のまとめ」（2020）
- ・文部科学省『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実』（2021）
- ・奈須正裕『個別最適な学びと協働的な学び』（2021）東洋出版社
- ・佐藤淳子『「数学的な見方・考え方」を育てる算数授業の研究』（2023）
- ・高橋純「GIGA スクール構想×クラウド活用」（2023）